２．外国ルーツの子どもを巡る問題

～学校外の学習支援の立場から～

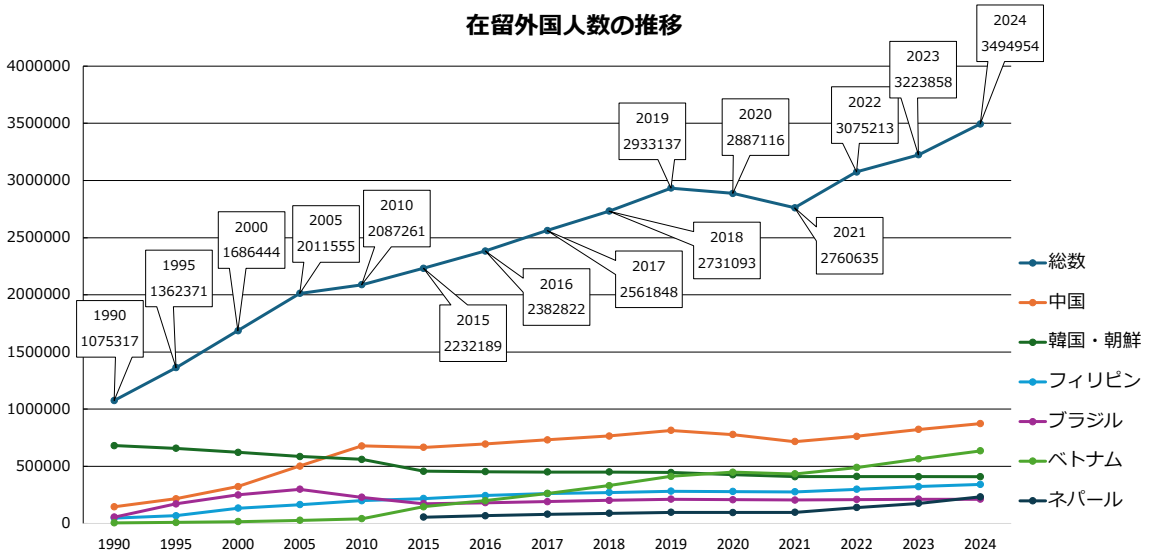
- 外国にルーツのある子ども

  外国ルーツ＝本人が外国籍の場合／日本国籍でありながら保護者は外国籍の場合

- 発表者（角替）は外国ルーツの子どもに対する学習支援を行うNPO（神奈川県大和市、静岡県静岡市）に所属し、支援活動に従事。

- 日本の公教育において学ぶ外国ルーツの子どもの状況と課題

在留外国人数の推移と多様化



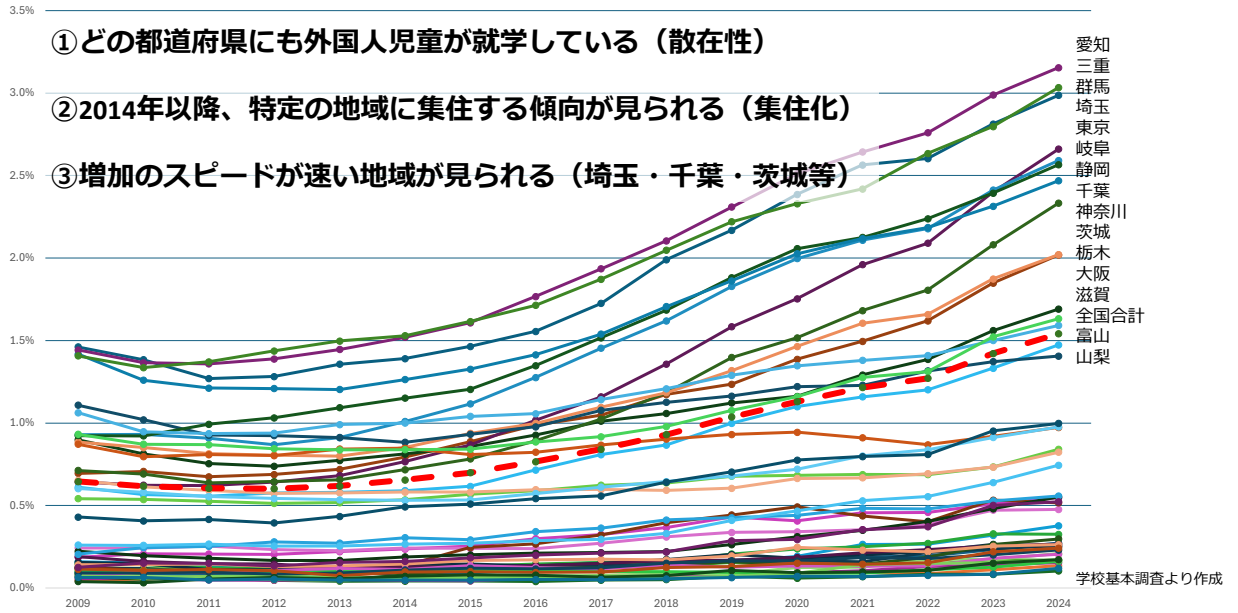
出典：出入国在留管理庁「令和6年末における在留外国人について」

都道府県別外国人児童比率の推移（小学校）

①どの都道府県にも外国人児童が就学している（散在性）

②2014年以降、特定の地域に集住する傾向が見られる（集住化）

③増加のスピードが速い地域が見られる（埼玉・千葉・茨城等）

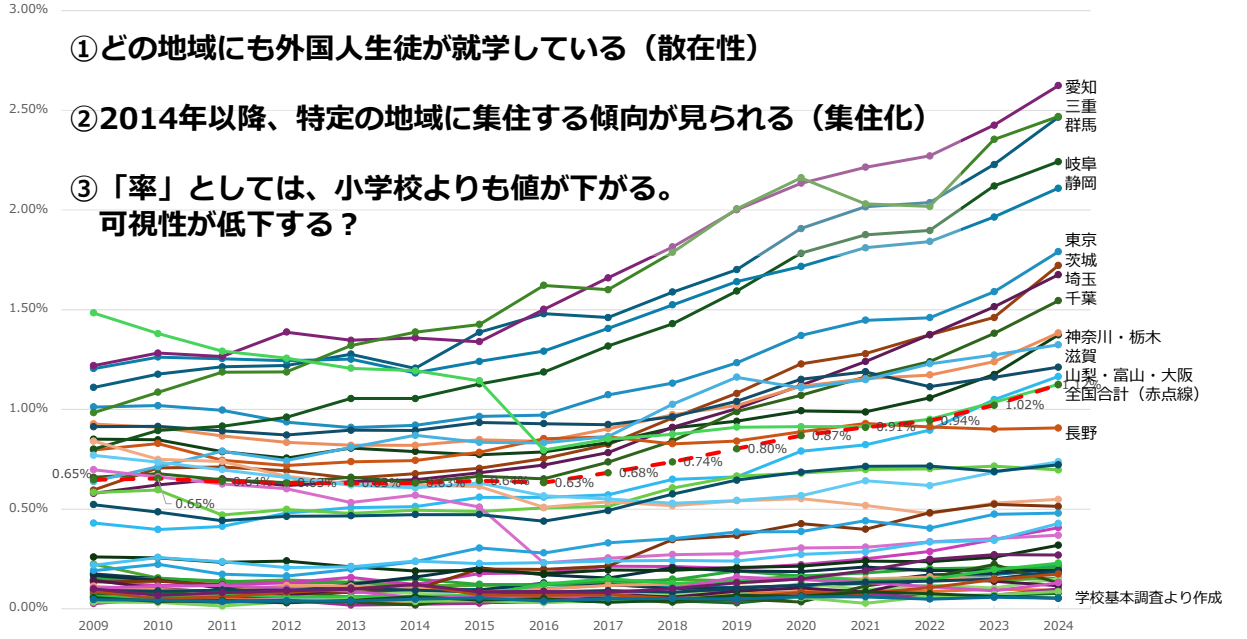


都道府県別外国人生徒比率の推移（中学校）

①どの地域にも外国人生徒が就学している（散在性）

②2014年以降、特定の地域に集住する傾向が見られる（集住化）

③「率」としては、小学校よりも値が下がる。
可視性が低下する？



外国ルーツの子どもの事例

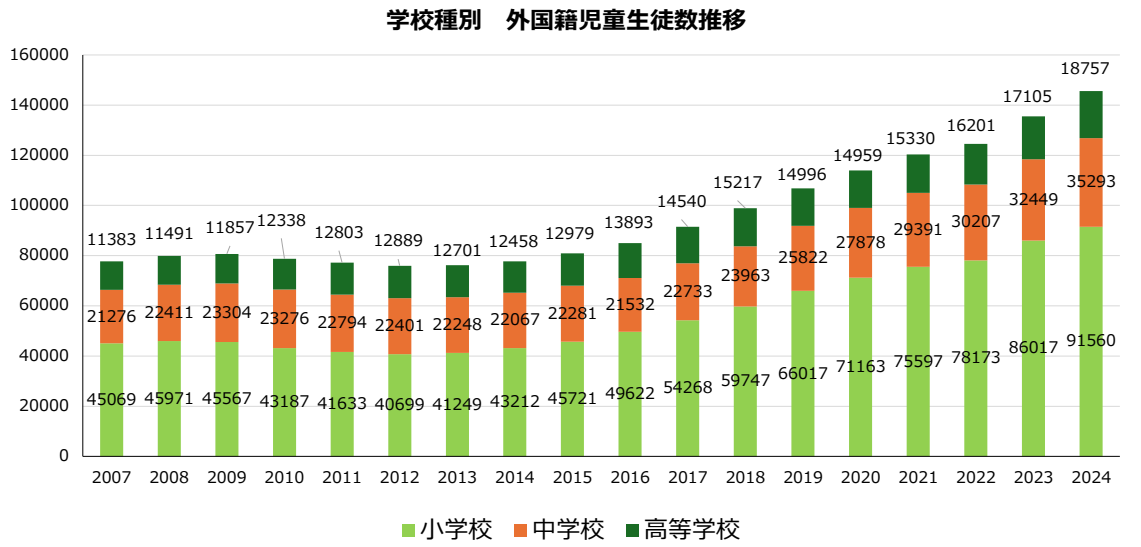
- フィリピンルーツの14歳男子
- 学習支援教室にて定期テスト対策に取り組む
  ・・・理科「水の電気分解の化学反応式」
- 「原子」「分子」「気体」「分解」等の用語の理解が不足
- 「授業では先生が何を言っているのか分からない」
- 「ただ椅子に座っているだけ」

→こうした状況は外国ルーツの子どもに関して言えば珍しいことではない。
むしろ、よくあるパターン。
支援に携わり始めて10年以上、こうした事例に事欠かない。**→なぜ？**

もうひとつの事例

- フィリピンルーツのＸ君（16歳）
- フィリピン生まれ、**小学校低学年**の時に来日
  （母親の国際結婚による）
- 日本の**公立小学校**を卒業→**公立中学校**に進学
- **不登校**気味のまま、中学校を卒業（**形式的卒業**）
- 卒業後、自宅近くの飲食店にてアルバイト勤務
- しずおか自主夜間教室を知り、高校受験を目指し学習→→現在、公立高校定時制に進学→中退

外国ルーツの子どもたちの学びの現状



文部科学省「学校基本調査」より作成

外国ルーツの子どもの抱える困難

- 日本語能力の不足→日本語を体系的に学ぶ場の不足
  （それらを利用する資源の少なさ）
- 中学校を形式的卒業→不登校ながら「卒業」とされる制度
- 社会的なつながりの希薄さ
  →社会関係資本を形成する機会の少なさ

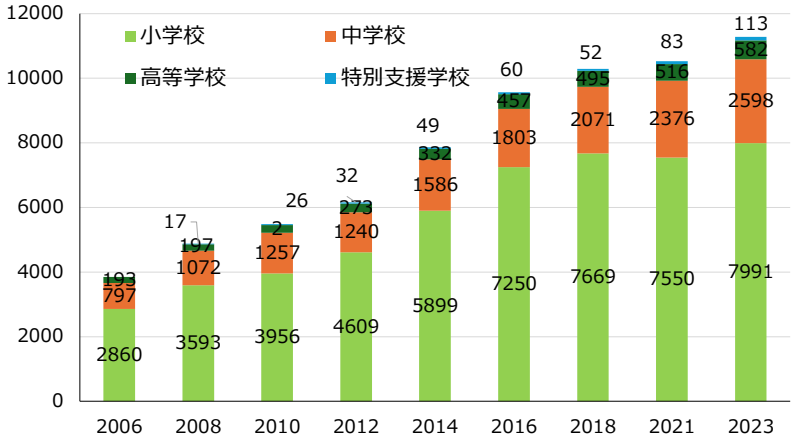
→これらのことは、外国ルーツの子どもだけの問題なのか？
→実際の公立学校の現場の状況は？

日本の公教育が抱える課題

- 教育資源としての外国ルーツの子どもが持つ可能性
  →グローバル化を見据えた際の、国際理解の重要性
  →社会の多様性に関する理解を深める存在

- 「外国ルーツの子ども」をどのように扱うか、
  教育法規（学習者を「日本国民」に限定」）や学習指導要領では？
  「日本語指導教室」や「国際教室」への「囲い込み」＝周縁化？

日本語指導が必要な**日本国籍**の児童生徒数の推移



文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況に関する調査」より作成

日本語指導が必要とされるのは、外国籍児童生徒に限らない。
日本語指導を必要とする日本国籍者（＝日本人）も確実に増加している。
国籍に関わらず、公教育として「日本語指導」が必要とされる。